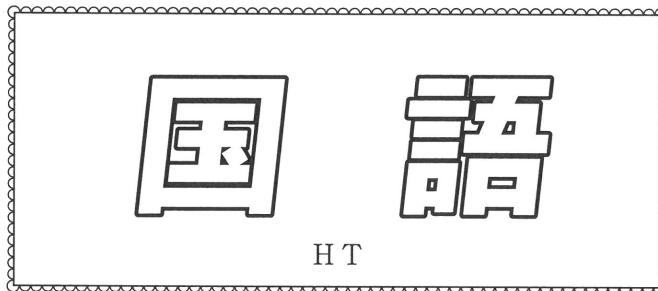


2025年度 入学試験問題



(50 分)

〔 注 意 〕

- (1) 問題は①～④まであります。
- (2) 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば

2

 と表示のある問いに関して ③ と解答する場合は、次の(例)のように解答番号2の解答欄の ③ にマークします。

(例)

解答 番号	解 答 欄
2	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- (3) 記述問題は解答用紙裏面の、所定の解答欄に記入してください。
- (4) 字数の指定のある設問については、句読点・カッコ・記号も字数に含めます。
- (5) 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入してください。また、受験番号はマークもしてください。
- (6) 試験開始の合図があったら、全てのページが揃^{そろ}っているかを確認してください。

一

次の傍線部のカタカナを漢字に改め、漢字は読みをひらがなで答えなさい。裏面の解答欄に楷書^{かいしよ}で丁寧に書きなさい。

- ① 土砂崩れで田畑がマイボツした。
- ② 会長と議長とをケンムする。
- ③ 相手をつウレツに批判する。
- ④ 音楽界のキヨシヨウと呼ばれる人。
- ⑤ 陳腐な表現ばかり使う。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表記を改めたところがあります。)

解答番号 1 8

今日は、これからいろんなことを学んでいく学生の皆さんに、「学ぶこと」と「思うこと」を対^{つひ}にして、お話ししたいと思います。なぜこの二つを一緒にしてお話するのか、また、なぜ一組でなければいけないのか、最初にその理由から始めましょう。

中国が清朝^{*しんちやう}であった時代、北京^{*ペキン}に、一種の国際的な大学院のような学校がありました。その学校は外国からの留学生がたくさん集まったところで、外国からの留学生のために学生寮^{せうしやう}みたいなものもありました。寮は国別になっていて、日本の留学生だけを集めた寮もあり、その建物はいまでも残っています。要するに、留学生の多い大学みたいなものだったわけですが、始業式とか卒業式には清朝の皇帝も出席したのです。日本でいえば第二次世界大戦前の東京帝国大学にちよつと似たところがありますが、その学校は、教育上のモットーを掲げていました。そこに「学ぶこと」と「思うこと」の両方が対になって出てくるのです。

その第一行は、「学びて思わざれば罔^くし(学而不思則罔)」というもので、第二行は「思いて学ばざれば殆^{あやう}し(思而不学則殆)」というものです。教育にはこの二つの要素が欠かせない、というわけです。

「学びて思わざれば罔^くし」の「罔^くし」は「無知だ」「愚かだ」という意味で、「よくわからない」ということです。学んでもみずから考へなければダメだ、本当の知識にはならない、ということなのです。「思いて学ばざれば殆^{あやう}し」は、たとえみずから考えていても学ばなければ、その人の、あるいはその集団の行動は危ういということです。その二つが対になっています。これは、『A』のなかの「為政第二 一五」から引いた有名な言葉です。どういう状況のなかで孔子^{こうし}が弟子にそういうことを言ったかは、あまりよくわかっていません。B、いろいろな解釈がありうるわけですが、ここで、その意味を考えてみましょう。

まず「学ぶ」とはどういうことでしょうか。

孔子は紀元前六世紀から五世紀の人です。孔子が「学ぶ」と言ったときの対象は、彼自身^{*へんさん}が編纂^{へんさん}したとされる中国の古典でした。それらの本が全部で六つあったことから「六経^{りくけい}」と言いますが、それらを中心にして古代中国の知恵を知ることが「学ぶ」ことだったのです。

〈中略〉

現在学校で「学ぶ」のは、もちろん「六経」ではありませんね。しかし、「学ぶ」ということの意味は、基本的には孔子の時代と同じだと言ってよいと思います。これまでに築き上げられてきた文化や知恵など、いままでにあったことの内容、伝統、あるいは遺産を

学ぶということなのです。

それでは具体的に、われわれは何を学んでいくのでしょうか。たとえば、学校で学ぶ知識のほとんどは、すでにつくられた、ある種の「体系」です。これは数学から歴史まで、すべてに当てはまります。C、与えられた知識です。それは広く社会が認めているものですから、そういう意味では、個人的な主観とは関係のない、客観的な体系を学ぶのだということが言えるでしょう。

こう考えると、「学ぶ」ことの意味は孔子の時代からいままでだいたい同じであると言った意味がわかるのではないのでしょうか。「学ぶ」対象は「与えられたもの」なのです。「与件」という言葉がありますね。「与えられた条件」ということですが、そういうものを学ぶということ、つまり、歴史や世界について客観的な知識を獲得するということです。そうでなければ、本当に知ったということにはならないのです。

しかし、孔子は、そのうえで「思わなければダメだ」と言っています。それでは「思う」ことと「学ぶ」こととは、どのような関係にあるのでしょうか。そして、そもそも「思う」こととは、どういうことなのでしょう。

私は、孔子が言いたかったのは、次のようなことだと思のです。各人がなにか「これが問題だ」と思うことを持っていて、自分の頭で考えてその解決法を求めているときに、実際にその問題を解決するためには知識が必要だから、知識を学ぶ。そういうことを言っているのだと思います。

ただそこにあるものを学ぶ、ということではありません。教師が教えてくれるから学ぶのではない。個人が自分自身で問題を考えていて、その問題を解くために知識が必要だから学ぶのです。そのとき、知識は「知的な道具」に転化されるわけで、自分の見つけた問題を、その道具を使って解こうとするのです。

「これが問題だ」と感じることに、これを日本語では、「問題意識」といいます。ある問題意識が自分のなかにあり、そのことについてよく考えること、それが「思う」ことです。それは誰かに与えられたものではなくて、自分のなかから出てきた問題意識です。それがないと本当の意味でものごとを理解することにならない。だから教師が教えてくれることを学ぶだけじゃダメですね。学ぶだけでは、自分自身の問題を解決できないでしょう。

問題解決をするために必要なのは、まず問題を意識することです。だから、意識化された問題が自分自身のなかにあることが学ぶことの動機になります。「思うこと」と「学ぶこと」は、このように関係しているわけです。

もし「学ぶこと」が客観的な事実であるとすれば、「思うこと」は主観的な可能性の問題です。その問題を解決することは未来の可能性であり、まだ解けていないわけです。それが「問題意識」という日本語が表していることです。【①】

これはいい言葉ですね。英語にはなりにくい、少なくとも英語では、それほど使わない言葉ですが、日本語ではよく使います。たぶんドイツ語からきているのでしょう。ドイツ語では「プロブレマティーク」という言葉を使います。ドイツ語の「プロブレム」は「問題」で、「問題性」が「プロブレマティーク」です。【②】

「思う」というのはプロブレマティークの問題、問題性の意識化、です。それがないとものごとを本当に理解したことになります。

【③】そもそも自分で問題を持つていなくて話をただ聞いているだけでは、その知識はただ【D】と素通りしていくだけでしょう。試験勉強の時には覚えていても、試験が済んだら忘れてしまいます。【④】孔子が問題意識がなければ、ものごとをよく理解できないと言ったのは、おそらくそういう意味なのです。

しかし問題意識だけがあって知識がないとすれば、それは「危ない」ことになります。「危ない」とは、こういうことをしたいと思ったときに、よく考えずに突入すると、とんでもない結果を生ずることがある、ということです。【⑤】それを【A】では「殆い」という言葉で表しているのです。

(加藤周一『学しるぶいと 思うこと』)

(注) * 清朝……一六四四年から一九二二年まで続いた中国最後の王朝。

* 北京……中国の首都。清朝でも首都であった。

* 東京帝国大学……現在の東京大学の前身。日本の最高学府として、学術研究と教育の中心的役割を果たした。

* モットー……教育上の努力の目標として掲げる言葉。

* 編纂……集まった材料を取捨選択して書物を作ること。

問一 空欄Aに当てはまる書物の名称として、最も適当なものを次から番号で選びなさい。 1

- ① 平家物語 ② 徒然草 ③ 史記 ④ 論語 ⑤ 孟子

問二 空欄B・Cに当てはまる言葉として、最も適当なものを次からそれぞれ番号で選びなさい。

B 2・C 3

- ① つまり ② また ③ なぜなら ④ だから ⑤ しかし

問三 傍線部1「学ぶ」ということの意味は、基本的には孔子の時代と同じだと言ってよいと思います」とあるが、どのような点が同じなのですか。その説明となる次の文の空欄に入る言葉を、本文から十五字以上二十字以内で抜き出して書きなさい。裏面の解答欄に記入すること。

十五字以上二十字以内 点。

問四 傍線部2「思う」とことと「学ぶ」とことは、どのような関係にあるのでしょうか」とあるが、その説明となる次の文を完成させなさい。ただし、「問題意識」「動機」という二つの言葉を必ず使い、四十五字以上五十字以内で裏面の解答欄に記入すること。

「思う」とことは、
四十五字以上五十字以内、という関係。

問五 傍線部3「知識は「知的な道具」に転化される」とあるが、これはなぜですか。最も適当なものを次から番号で選びなさい。

4

- ① 知識が増え、それぞれの関連性を理解できるようになることで、その知識を効果的に利用できるようになるから。
- ② それまで単なる与えられた知識だったものが、問題を解決するための積極的な意味を持つようになるから。
- ③ 自分自身の持つ精神的な課題を自覚することによって、知識に対する理解が深まり使えるようになるから。
- ④ さまざまな問題を経験し人間的に成長することで、知識を自分の道具として使いこなせるようになるから。
- ⑤ 未来について考えることを通して知識は単なる道具に過ぎないことに気づき、それらに頼らなくなるから。

問六 傍線部4「主観的な可能性の問題です」とあるが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から番号で選びなさい。

5

- ① すでに広く認識されている知識を得るだけでなく、自分自身が問題を解決していく可能性を持つということ。
- ② たった一つの正しい答えが存在するものではなく、時代や国によって振り回される可能性が高いということ。
- ③ あくまでも個人の価値観によって生まれた考え方に過ぎず、広く社会が認める「体系」にならないということ。
- ④ 問題の解決につながるかどうかは運によるところが大きく、必ずしも社会に認められるとは限らないということ。
- ⑤ よく考えて問題に取り組まないと失敗する可能性が高く、知識の少ない人間が挑んではいけないということ。

問七 本文には次の一文が欠落しています。本文中の【①】～【⑤】のどの場所に入れるのが最も適当ですか。番号で選びなさい。

6

しかし、自分の問題意識にひっかかってくることだったら、そういうことにはなりませんね。

問八 空欄Dに当てはまる言葉として、最も適当なものを次から番号で選びなさい。

7

- ① 前から後ろへ ② 東から西へ ③ 右から左へ ④ 上から下へ ⑤ 目から鼻へ

問九 本文に合うものとして最も適当なものを次から番号で選びなさい。

8

- ① 孔子は、皇帝の命令で清朝に国際的な学校を作り、多くの優秀な留学生を集め、世界トップレベルの教育をしていた。
② 孔子は、考えずに学ぶことばかりに熱心な弟子が多いことを嘆いて、「学びて思わざれば罔し」という言葉を伝えた。
③ 筆者は、学校で学ぶ知識には意味がなく、自分で問題を解決する人間になれば世界で通用しないと考えている。
④ 筆者は、アメリカでは「知識」が重視されてきたが、日本やドイツでは「問題意識」が重視されてきたと考えている。
⑤ 筆者は、自分の中に問題を意識する姿勢を持たなければ、ものごとを本当に理解することはできないと考えている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表記を改めたところがあります。)

解答番号 9 17

「彼女」は、福島県三春町に住む姉の家にやって来た。「彼女」の姉は、もともと都会に住んでいたが、夫とともにこの町に引っ越して来て、今は田舎暮らしをしている。本文の初めは、「彼女」が姉の家で一泊した翌朝、朝食をとっている場面である。

「一之さん、どう？ 仕事の方はうまくいってるの？」
*かずゆき

反射的に、彼女は「まあまあ、みたいよ」と答えた。口にしてしまってから、思わず舌打ちしたい気分になった。チャンスだったかも知れないのに。

本当は、まあまあ、などと言っている場合ではなかった。今回、彼女は夫に頼まれて、姉に借金の申し込みに来たのだ。

数年前、彼女の夫は小さな会社を興した。最初のうち、彼女はそれが夫の長年の夢だったのだと解釈していた。ところが、実はそれまで勤めていた会社をリストラされたためなのだと、後から聞かされた。夫は、リストラされたことを彼女にも告げないまま、新しい職を探してほぼ半年の間、毎日、出勤しているふりをしていたのだ。だが、思ったような再就職先が見つからない。嘘をつき通すにも限度がある。誰も使ってくれる人間がいらないのなら、自分で何かを始めるより仕方がない、それが夫の下した結論だったらしい。

——今に見ていろって。死に物狂いで働いて、会社なんか見返してやるから。

すべてを打ち明けた時、夫はそんな言葉で彼女の動揺と興奮を静めようとした。だから彼女は、それまで通り、夫の言葉を信じることにした。家庭は彼女が守る。彼女と子どもたちの生活は夫が守る。その構図は、決して変わることがないと思っていた。

半年か一年は、無収入でも仕方がないと夫は言った。だから、彼女は待った。だが、一年半が過ぎ、二年が過ぎようとしても、夫が家に入れられる金額は安定せず、以前の職場にいた頃の額には遠く及ばなかった。蓄えは目に見えて減っていた。いくら、今が辛抱の時だ、もう少し耐えてくれと言われても、日々の暮らしにも困るようになっては、まだ高校生の子どもを抱えて、どうすることも出来なくなる。結局、彼女は慣れないパート勤めにも出るようになった。

ここに来て、夫の会社はいよいよ行き詰まってきた。銀行や行政機関にも足を運んで、夫は夫なりに精一杯に融資先を探している。だが、夫の身内からは、会社を設立する当初も相当の援助を受けていたし、もう、頭を下げて回れる場所が残っていないかった。「義姉さんに頼んでもらえないか」と言ったときの夫は、A 見えた。

食事が済むと、彼女は姉に誘われるまま、町を見て回ることにした。都会に住んでいた頃は、大きな外車を乗り回していたのに、今は小さな軽自動車のハンドルを握る姉は、以前とはまるで異なる乗り心地の車を、それでも不満そうな顔もせずには運転している。もう一台ワゴン車があるが、そちらは義兄が使っているし、細い山道を走り回るのには軽自動車の方が楽なのだと姉は笑った。

確かに、道の大半は細く曲がりくねっていてガードレールもなく、しかも街灯なども見あたらなかった。夜になったら、さぞかし心細い道だろうと思うのに、姉は昨日、夜は暗くて当然なのだと笑って笑った。だからこそ、光が有り難く感じられる。それに、星の美しさといった言葉に出来ないほどののだと。

「大したものねえ。あの一之さんが、今や社長さんで、あなたは社長夫人なんだものねえ」

「お姉ちゃんの方が、そうなると思ってた」

少し前までの姉を思い起こしながら、彼女は呟いた。時折、鮮やかな柿の実の色が、目に飛び込んでくる。昔は養蚕が盛んだったという話で、その名残なのか、林のように大きく育ち、手も加えられないままの桑畑が、ところどころに見えた。

「私だって。まさかあの方が、田舎で喫茶店をやりたいなんて言い出すとは思わなかったものね」

それこそがゆとりではないか。都会から離れて、環境の良い場所で、好きなことをして暮らせる、そんな贅沢な第二の人生があるものかと彼女は思う。

「後でちょっと寄ってみる？　意外に雰囲気のあるお店なのよ」

「お義兄さんがコーヒー淹れるの？」

「当たり前よ。今や立派なマスターなんだから」

義兄は、いわゆる企業戦士だった。出世も早かった代わりに、家庭を顧みることなどまるでなく、休日も滅多に家にいないくらいのも男だった。それが、急に思いついたように、田舎で静かに暮らしたいと言い出したのだそう。それまで重役夫人として、暇を持て余しながら贅沢に暮らしていた姉の人生は、そのひと言で大きく変わった。

「でも、意外にヒゲが似合ってたんで、昨日、びっくりしたわ」

「——あの人の今の自慢っていったら、あれくらいなものよ」

一瞬ひやりとして隣を見た。かつては、いつも完璧に化粧をして、家にいるときでもイヤリングをしていたような姉が、今は素颜に近い薄化粧で、軽自動車のハンドルを握っている。穏やかに見える横顔は、²ここでの快適な暮らしを物語っているわけではないのだろうか。姉の身にも、やはり彼女の知らない何かが起こっていたのだろうか。そんなはずがないと思いつつながら、それでも彼女は、もう何

年も会っていなかった姉の横顔を、改めて見つめた。その視線を感じたらしく、姉は B こちらを見て、また微笑^{ほほえ}んだ。

「後ろ盾も何もかも、なくなったからね」

「——まあ、何百人もの部下がいた頃とは、違うんでしょうね」

「それを、自分自身に納得させるために、すべてを変える必要があったのよ」

「納得、させるために——」

どうということなの、と聞こうとしたとき、姉が小さなため息をついた。

姉は、彼女より六歳上だった。幼かった頃から、彼女が見てきた姉は、常に自分よりもずっと先を歩んでいる、きらめくような存在だった。一人っ子だった時期が長い上に病気がちだったせいも、我が儘^{ままだ}で甘えん坊なところがあつたし、親の手を焼かせたのも姉の方だ。彼女はいつも、半ば置いてけぼりを食らった気分、少し離れた場所から姉を見つめていた。どう足掻^{あが}いても追いつけない、そう感じていた。

坂道を上っていた車は、やがて見晴らしの良い場所に出て止まった。

「ほら、安達^{あた}太良山^{たらやま}が、雪を被^{かぶ}ってる」

姉が遥^{はる}か彼方^{かなた}を指さした。彼女は車から降りて、冷たい風に吹かれながら、雄大なパノラマ風景を眺めた。あれが安達太良山。郡山から三春に抜けた時に渡った川は阿武隈^{あぶくま}川。昔、学校で習った『智恵子抄^{*ちえこしょう}』を思い出す。同じ芸術家同士でありながら、夫である高村光太郎を支え続け、やがて心を病んだ女性。

——夫を支えて、振り回されて。

本当は、姉になど頼りたくはないのだ。だから、自分たち夫婦が苦勞^{くろう}している姿など知られたくなくて、一度も三春には来なかった。彼女には、常にそういう思いがあつた。いつでも自分を子ども扱いしてきた姉に対して、決して弱みを見せたくない、一人前の女性として、立派に張り合っていきたいと、そう思ってきた。

「やっぱり寒いわね。車に入ろう」

姉が身震いをしながら言った。きびすを返しかけた姉に、彼女は思い切つて「あのね」と声をかけた。くるりと振り向いたときの姉は、やはり母に似ている。³ ああ、本当の母だったら、母が生きていてくれたらと、つい思った。

「——お姉ちゃん、お母さんに似てきたわ」

考えていたのとはまるで違う言葉しか出なかった。姉はハーフコートの襟をかき合わせながら、「そうかしらね」と笑った。

「お母さんも、苦勞が多かったから」⁴

姉の口元には、相変わらずの柔らかな微笑みが浮かんでいた。それが、満ち足りた生活から来るものではなく、ある種の諦観^{*ていかん}が生み出したものであることを、彼女は初めて理解した。

小さな車の中で、しばらくはお互いが無言だった。隣から伝わってくる姉の柔らかな気配が、何だか急に、深い悲しみを含んだものに感じられてきた。ハンドルを握る姉の手がずいぶん荒れていることにも、今になって初めて気がついた。以前はマニキュアのよく似合う、白く滑らかで C した手だったのに。

「言わなかったけどね」

口を開いたのは姉の方だった。曲がりくねった細い道は、山裾^{やますそ}に張り付くような集落の脇を抜け、また新しい風景に続いている。

「あの、好きで会社を辞めたわけじゃないのよ」

「そう、なの？」

「詳しいことは知らないけど、あの人の直属の部下が、何か問題を起こしたの。それに、社内の派閥争い^{から}みたいなものも絡^{から}んでたんじやないかしらね」

「——それで、お義兄さんが？」

「残ろうと思えば、残れないことはなかったらしいわ。でも、どうせ子会社一つ任されるのが落ちで、本社に戻れることなんか、二度とないだろうって。プライドの高い人だから。それに、その部下は、あの人が一番目をかけてきた人だった。結局は裏切られたのよ」

姉の口調は静かだった。静かな分、やるせなさ^さがにじみ出ている。

「あの人の立場が危なくなつたって分かった途端、鳥の群が飛び立つみたいだね、周りの人がばあつと消えたの。本当に、ばあつと。あの人も私も、何だか馬鹿馬鹿しくなつてね、この際だから全部捨てて、知っている人の誰もいない土地に行っちゃおうかって」

男たちが外の社会でどんな仕事をしているのか、どういう力関係の中で、何を頼りに前進しようとしているのか、彼女にはまるで想像もつかない。だが、義兄⁵と姉が味わつた絶望と屈辱は、彼女にも分かるところだった。彼女の夫だって、自分がリストラの憂^{うれ}き目に遭うなどとは、考えたこともなかったに決まっている。仕事⁵が夫に自信を与え、人間を大きく見せていた。それが、いとも簡単に奪われた現実を、夫は家族に打ち明ける以前に、夫自身の中で納得させることが出来ずにいた。そして彼女も姉同様に、女房同士のつきあいか

らは、 D 切り離された。

「一杯のコーヒーを淹れるために、あんなに遠回りをしてきたのになって、最近では、そんなことを言うようにもなったけど。でも、可哀想に思うこともあるの。本当なら、今が一番働き盛りのはずなのにって」

何もかも、初めて聞く話だった。姉はいつだって、義兄には興味も抱いていない様子だったし、とにかく夫は健康で、不自由のない生活さえ保障してくれていれば良いのだと、そんなことを言っていたはずなのだ。

⁶「私たちが思ってるほど、強くないのよ、男なんて」

「——そうね」

「スーツとネクタイを剥ぎ取って、社員証も名刺もなくなったら、本当に頼りない、迷子みたいな顔になるんだから」

「——本当に、そう」

夫の顔が思い浮かぶ。じつと見つめることさえはばかれるような、哀れで頼りない顔。

「その上、家庭もなくなったらね、もう、どうしようもないわ。年をとった野良犬みたい」

「だから、お姉ちゃんもついてきたの？」

⁷姉の横顔は相変わらず穏やかなままだった。車は古い佇まい^{たてま}を見せる町の中心に向かっている。

「これまで好き勝手なことをさせてもらったしね。また新しい経験が出来ると思えば、それもいいわ。女って強いものよね」

それに、今頃になって、ようやく夫婦で会話する時間が持てるようになったのだと、姉はくすくすと笑った。結婚して二十年以上も過ぎて、初めて自分と夫とは対等なのだと思えるようになったとも。

(乃南アサ『行きつ戻りつ』所収「姉と妹」)

(注) *一之さん……「彼女」の夫の名。

*『智恵子抄』……詩人・高村光太郎が一九四一年に発表した詩集。光太郎が妻の智恵子との間に培った愛を綴っている。

*諦観……あきらめて、平気な態度でいる様子。

問一 傍線部1「チャンス」とは何をするチャンスですか。本文から五字以上七字以内で抜き出して答えなさい。裏面の解答欄に記入すること。

問二 本文中の空欄Aに入るべき言葉として最も適当なものを次から番号で選びなさい。

9

- ① とても感謝しているように
- ② 今にも泣き出しそうに
- ③ 怒りを押し殺しているように
- ④ いかにも自信がありそうに
- ⑤ このうえなく幸せそうに

問三 傍線部2「ここでの快適な暮らし」とはどのような暮らしですか。その説明として最も適当なものを次から番号で選びなさい。

10

- ① 新鮮な食材を手に入れやすい環境の中で、豊かな食生活が続けられる暮らし。
- ② 移住先の住人とも豊かなつながりができて、人間関係にストレスのない暮らし。
- ③ 都会から離れた大自然の中で、経済的に不自由なく贅沢ができる暮らし。
- ④ 日常の変化に乏しい田舎で、何もすることがなくて退屈を持て余している暮らし。
- ⑤ 都会から離れた自然豊かな環境で、自分の好きなことができる暮らし。

問四 本文中の空欄B・C・Dに当てはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれの選択肢から番号で選びなさい。

B

11

C

12

D

13

B

- ① ちらりと
- ② おずおずと
- ③ まじまじと
- ④ 悠然と
- ⑤ あたふたと

C

- ① 淡々と
- ② がっしりと
- ③ ぎすぎすと
- ④ ほっそりと
- ⑤ ほのぼのと

D

- ① ぶらぶらと
- ② あっさりと
- ③ ちゃっかりと
- ④ だらだらと
- ⑤ めっきりと

問五

傍線部3「ああ、本当の母だったら、母が生きていてくれたらと、つい思った」とあるが、「彼女」はなぜこのように思ったのですか。「母」という言葉を必ず使い、三十五字以上四十字以内で答えなさい。裏面の解答欄に記入すること。

問六

傍線部4「お母さんも、苦勞が多かったから」とあるが、これは姉のどのような思いによる言葉ですか。最も適当なものを次から番号で選びなさい。

14

- ① 母は苦勞ばかりの人生であったが、自分はそうありたくないという思い。
- ② 母の苦勞のおかげで、自分は同じような苦勞をせずにすんだという思い。
- ③ 母が苦勞してきたように、自分も相應の苦勞をしているという思い。
- ④ 母は確かに苦勞してきたが、自分の苦勞に比べれば大したことはないという思い。
- ⑤ 母の苦勞によって幸福を手に入れたので、自分もそうありたいという思い。

問七

傍線部5「義兄と姉が味わった絶望と屈辱」とあるが、具体的にはどのようなことがあったのですか。最も適当なものを次から番号で選びなさい。

15

- ① 義兄が、自分の直属の部下が会社内で問題を起こしたことによる責任を取って子会社へ転勤になったものの、そこでの人間関係をうまく作ることができず、悩み込んでしまったということ。
- ② 義兄が今まで会社内で重要な職責を果たし、成果を挙げただけで周囲から人が離れ、部下による裏切りにもあって、この上なく悔しい思いをしたということ。
- ③ 義兄が、仕事上で大きな問題を起こしたことで会社内での派閥争いに破れ、部下たちとの人間関係が悪くなって、会社を無理やり辞めさせられるという憂き目にあったということ。
- ④ 義兄が、会社内のトラブルに巻き込まれて立場が悪くなり、同時に周りの人たちが一気に離れていったことで、会社につづけることに意味が見いだせなくなったということ。
- ⑤ 義兄が、会社で多くの部下に目をかけて人間関係を築き、社内の派閥争いを勝ち抜こうとしたにも関わらず、逆に人がどんどん離れていった、結局は孤立してしまったことで疎外感にさいなまれることになったということ。

問八 傍線部6「私たちが思ってるほど、強くなかないのよ、男なんて」とあるが、姉は何を念頭にそのように言うのですか。最も

適当なものを次から番号で選びなさい。 16

- ① 会社で責任ある立場であった夫が、田舎暮らしを自分では決断できなかったこと。
- ② 企業戦士だった夫が、結局は挫折して仕事を最後まで続けられなかったこと。
- ③ 夫が仕事や会社を失ったとたん自信をなくし、弱々しい存在になったこと。
- ④ 会社では部下に高圧的な態度をとっていた夫が、家庭では弱音ばかり吐いていたこと。
- ⑤ 田舎での暮らしは夫が自分で望んだことなのに、いまだに馴染めずにいること。

問九 傍線部7「姉の横顔は相変わらず穏やかなままだった」とあるが、姉のこの表情からどのようなことを読み取ることができますか。最も適当なものを次から番号で選びなさい。 17

- ① 田舎暮らしは夫が勝手に決めたことであり、姉はそのことについて不満があるが、昔のことなので今はもうあきらめているということ。
- ② 慌ただしい都会での生活から解放され、自由気ままに過ごすことができる今の暮らしに姉は何の不満もなく、楽しくて仕方がないということ。
- ③ 姉にとって今の田舎での生活は不自由なことばかりで不満が多いが、いつかは都会に帰ることができると信じているということ。
- ④ 姉が都会にいたときは気の休まるひまがなかったが、今は田舎でのんびりとした暮らしの中で、精神的にすっかり安定しているということ。
- ⑤ 田舎暮らしは当初から姉の望んでいたことではなく困難もあるが、今は前向きに考えてこの暮らしを受け入れているということ。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表記を改めたところがあります。)

解答番号 18 24

古の書の今に伝はらざるは、中頃より世の乱れうち続き、写し伝ふる人はなくて、さる頃火に焼け失せぬるが多きなるべし。しかはあれど、なほ数々写し伝へたるものなきにはあらねど、中頃より一つのわるき習はしありて、秘め隠してたやすく人に見することをなさざりけるより、亡び失せぬるもあまたありぬべし。

今、古の書の残れるに、昔人の奥書あるを見るに、あるいはこの本他見あるべからず、あるいは秘むべし秘むべしなど記さざるはなし。そもそも書は、広く世にも伝へ、後の人の標ともなすべきものにこそあなれ。いたく秘め隠して人に見することを嫌ふよしやはあらん。中頃よりなべてかかるひが心得の人のみありけるは、今より思へばいともいとも嘆かはしきわざにこそありけれ。古より伝はれる書を、ただ、我のみひとりの宝とのみ思ひたらんは、あさましくいやしき心と言はまし。

書は遠き古よりも伝はり、また今より遥かなる世のすゑにも、長く伝ふべき物なるを、わづか百年にたらぬ命のうちに、しばらくこれを我が物と思ふとも、つひに身失せなん後、その子、孫などのおなじ心ならばこそあらめ、その道好まざらん人ならんには、いたづらに文殿のうちに朽ちはて、または、あらぬ人の手にも落ちぬべし。されば書をたくはへおきて、子、孫に伝へんとするは益なきわざなり。ただ書は ならずと心得おきて、おほやけに広く伝へて、世に絶えせざらんことを思ふべきことにこそ。

(注)

*中頃……そう遠くない昔。

*ありぬべし……きつとあるだろう。

*奥書……書物の末尾に、年月日や筆者名、書かれた事情などを記したもの。

*よしやはあらん……理由があるだろうか、いやない。

*かかる……このような。

*いたづらに……無駄に。

*文殿……書庫。

*落ちぬべし……きつと落ちるだろう。

(村田春海 はるみ 『織錦舎随筆』)

問一 波線部 A「すゑ」・ B「おほやけ」を現代仮名遣いに改めたものとして適当なものを、それぞれの選択肢から番号で選びなさい。

A 「すゑ」
A 18 · B 19

① すう ② すえ ③ すお ④ すい ⑤ すあ
B 「おほやけ」

① おふやけ ② あふやけ ③ おおやけ ④ おうやけ ⑤ あうやけ

問二 傍線部 1「わろき習はし」 2「ひが心得の人」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれの選択肢から番号で選びな

さい。 1 20 · 2 21

1 「わろき習はし」

① 役に立たない学習 ② 厳しい練習 ③ 巧みな技の習得 ④ よくない習慣 ⑤ 奇妙な風習

2 「ひが心得の人」

① 考え違いをしている人 ② 負けず嫌いな人 ③ 好き嫌いの激しい人 ④ 物事の判断が遅い人
⑤ 何事にも中途半端な人

問三 傍線部 3「書をたくはへおきて、子、孫に伝へんとするは益なきわざなり」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。

最も適当なものを次から番号で選びなさい。 22

- ① 自分が死んだ後も、書物を子や孫に伝えて一家で独占しようとすることは、あまりにも欲の深い考えだから。
② 書物が書庫の中で朽ち果てたり、その書物を所有するのに不適切な人の手に渡って失われる恐れがあるから。
③ 書物が子や孫に伝わることによってその家だけで代々受け継がれ、他の目に触れる機会が永久になくなるから。
④ 大切な書物が後世に伝わるように保管しなければならないということが、子や孫の大きな負担になるから。
⑤ 書物を子や孫に伝えて残しておくよりも、売り払ってお金に替えた方がよっぽど子や孫のためになるから。

問四 本文中の空欄に当てはまる言葉として、最も適当なものを次から番号で選びなさい。

23

- ① 我があるじの物 ② 若き民の物 ③ みかどの物 ④ 昔人の物 ⑤ わたくしの物

問五 筆者は書物とは本来どうあるべきものだと考えていますか。その答えとなる言葉を本文より二十字以上二十五字以内で抜き出し、

最初と最後の五字を書きなさい。裏面の解答欄に記入すること。

問六 筆者が本文で述べていることに最も合う文として適当なものを、次から番号で選びなさい。

24

- ① 長い年月、所有する一族によってその存在を秘めて隠しておいたことによって、今に伝わった古い書物は決して少なくない。
② 古くから伝わった書物は、破損や紛失を避けるために、人目に触れない場所で大切に保管し、後世に伝えなければならない。
③ 書物が失われた原因として、世の中が乱れて書物を書き写す人がいない頃に、そのまま焼失してしまったことも考えられる。
④ 古い書物を所有している者は、自分が死ぬ前に、信頼できる人物に譲渡することで確実に後世に伝わるようにするべきである。
⑤ 昔の書物の中には、その奥書に「他人に見せてはいけない」「この本を隠しておきなさい」と書いていないものもある。